

非認知的能力等に係るデータ分析

研究の概要

- ◆**課題認識** 教育実践の取り組みをとおして、非認知的能力を育成するには、どのようにすればよいのか、データを基に検討したい。
- ◆**研究の目的** 「未来への一歩」を活用した学力向上の取り組みの結果データ等に基づき、各データどうしの関係を分析することで、学力向上にむけた効果的な取り組み、非認知的能力と学力との相関、効果的な取り組みとするための視点等を明らかにし福岡県の学力向上を図ること。
- ◆**研究の方法** 「未来への一歩」を活用した学力向上の取り組みの実施。年2回（6月・12月）に「定着状況診断テスト」・「児童生徒質問紙調査」を実施し、そのデータの集計・分析を実施する。（対象となる児童生徒数の総計はおよそ2万名）

研究のポイント・成果

◆研究のポイント（R2データ再分析）

(1) 効果のある学校：1回目と2回目の定着状況診断テストの正答率をもとにしたクラスター分析を実施した結果、参加校を小学校4グループ、中学校5グループに分類することができた。また、正答率の向上が見られたグループでは、「学校の授業などの中で「わかった」「できた」と感じて、うれしかったことがある。」「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う。」「勉強したことは、生活の中で役に立つと思うから勉強している。」といった非認知的能力にかかわる項目への肯定的な回答が増加していることが分かった。

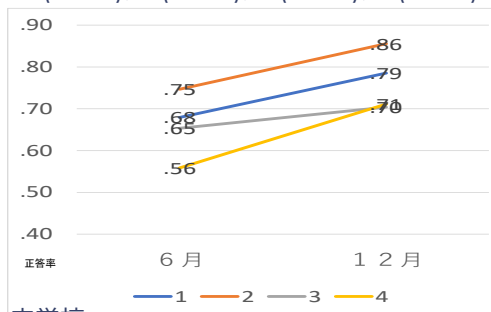
(2) Googleフォームを利用したデータ収集：令和3年度2回目（12月）の実施より、環境の整っている学校から導入した。比較的スムーズに運用することができ、さまざまなコストの削減にもつながることが確かめられた。

◆成果

非認知的能力の変化を確かめることができた。一方で、学校間差が大きいという実態も示された。ICTを活用したデータ収集を試行し有用性を確認できた。

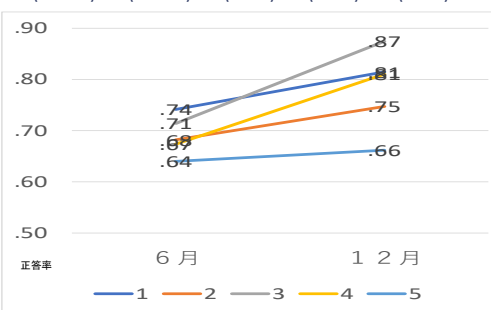
小学校

1 (N=31), 2 (N=31), 3 (N=25), 4 (N=10)



中学校

1 (N=12), 2 (N=20), 3 (N=8), 4 (N=7), 5 (N=7)



今後の課題

- ◆**非認知的能力育成プログラムの開発に向けて：**効果のある学校の特長を事例的に収集し記述し、非認知的能力を育成するには、どのようにすればよいのかについて検討をすすめる。
- ◆**データ分析を活かした教育改善に向けて：**今回の調査では、マークシートの読み込みに加えて、Googleフォームを利用した回答方式を導入した。従来の教員が手入力にてデータ入力をする手法に比べ、集計コストはさらに大幅に削減された。今後も、GIGAスクール構想で整備されたICT環境を活用したデータ収集・分析の仕組みを構築していく必要がある。